

天眼鏡

心をつなぐ和笛の響き

この夏の7月23日、スウェーデンのストックホルムの北、100km 弱のところにあるウブサラで和笛を演奏する機会を得た。ウブサラは、かつて王宮がおかれていた古都である。その王宮の庭園が、世界的に著名な植物学者であるリンネを記念した植物園となっており、ウブサラ大学がこれを管理している。ウブサラには研究のために滞在している日本人も少なくなく、こうした人たちをも含めて日本人会が結成されており、着実な活動を展開してきた。その日本人会が協力するかたちで植物園の中央にある博物館風のホールを使って、6月から9月まで日本文化展が開かれた。お茶会や着付け、折り紙の教室等が行われてきたが、この一環として和笛のコンサートが催されたものである。

この時期、ちょうど華道展が開催されており、日本人の華道家と現地アーティストが競演するかたちで作品が並べられ、あわせて花をテーマとした斬新な大型の写真パネル数枚も飾られていた。こうした空間の一角を利用してコンサートが開かれたのであるが、日本文化を象徴する素晴らしい作品群の中、外には植物園が見渡され、しかもホールでの音の響きはほどよく、幸運にも和笛演奏には絶好のシチュエーションに恵まれた。

当初、現地で琴か三味線を調達して、家内のこれの演奏に尺八で合わせる地唄中心の演奏を予定していたのであるが、結果的に手持ち可能な篠笛の二重奏と篠笛・尺八のソロ演奏となった。コンサートは夕方5時からの1時間。プログラムは日本の懐かしのメロディー、民謡、世界の歌の3部構成とし、民謡のみ尺八を使い、他は篠笛とした。果たしてスウェーデンでどれほどの

人が日本文化に興味を持っているのか疑問でもあり、日本人中心に2、30人のコンサートを想定していたのであるが、予想は大外れ。当日昼のリハーサルに地元ラジオ局が取材にきて、午後3時ごろ放送で開催案内してくれた効果もあってか、参加者は5、60人規模となり、かつその8割方は現地の人たちとなった。椅子は20脚ほどしか用意していなかったため、多くの人たちは立ち見となってしまった。

演奏して何よりも驚かされたのが、聴衆の日本の音楽に聞き入る熱心さであった。食い入るようにこちらの一挙手一投足を見つめている人から目を閉じて音に集中している人まで様々であるが、一音たりとも聞き逃すまい、そして日本の音楽に興味津々であることがピンピンと伝わってくる。これに応じてこちらもさらに心をこめて音を紡ぎ出していくという、演奏者と聴衆とが一つになって場が形成されていく得難い経験を味わった。

これらを通して、グローバル化にともないすべての領域で画一化が著しいが、異なるからこそ面白く、お互いに関心を持つての交流も可能になることを強く実感させられました。グローバル化の世界だからこそローカルを重視し、差別化していくことが欠かせない。そもそも文化・芸能の多くは農そして食の世界から生れ出たものである。まずは自らの地域の食と農、そして文化伝承を再評価し、誇りを取り戻していくことが出発点となろう。こうしたことをあらためて噛み締めた至福かつ貴重なひと時であった。

(農的社会デザイン研究所 代表
蔦谷 栄一)